7月の学習会の報告

７月の語る会は，「鳥獣戯画を読む」（６年生教材）の教材研究を行いました。

田中先生より

〇大学の授業の時間改変（９０分授業を６０分にすること）について。１日に６０分授業を１０コマしないといけないということになり，物理的に厳しい。黙って聞いていていいのだろうか。

〇やらなくてはいけないことを長期的に見ることが大切。最終的には，人々が幸せに過ごせることを望まなくてはいけない。自分たちの首を絞めるような進め方はよくない。効率を求めるがあまりに，ひずみが生じているように思う。夏休み，休めるときにはしっかり休みましょう。

小川先生より

〇目の前のやらなくてはいけないことを，何年か先のことまで見据えて実行していくことが大切。

〇おもしろ見つけ，丸ごと読みに取り組む学校が増えてきている。「深めなくていいのか」という質問を一番よくされるが，深めるところはきちんとある。例えば，「スイミー」にも，深めるポイントが３～４つある。

・「岩かげ」にいる魚の様子に着目すると，岩かげの奥に固まっている魚の様子が想像でき，「こわい」反応が深まる。（様子を読ませる）

・「だめだよ…」という会話文に着目し，この言葉はどのような声で言ったのか，ということを考えさせると「こわい」反応が深まる。

・「うんと考えた　いろいろ考えた」「なんとか考えなくっちゃ」などの言葉に着目し，「スイミーのやさしい気持ちの大きさをハートマークで表すとどの大きさか」と問いかけることによって，「なんとか考えなくっちゃ」「いろいろ考えた」「うんと考えた」「とつぜんさけんだ」などの言葉を根拠にスイミーのやさしい気持ちの大きさを読み深めていくことができる。「やさしい」反応を入口にして，言葉をつなぐと様子や気持ちが読めるという読み方を出口にしている。

子どもの実態に合わせて，どこに重点を置いて読み深めていくか選ぶとよい。言葉と言葉をつないで読むと読みが深まっていく。子どもたちの実感をもった読みにしていく必要性がある。また，教師自身がおもしろ見つけの経験をとことんしないといけない。そうすることで，子どもの読みをつくる過程が分かるようになる。ネットをしっかり張っておくと，子どもからどんな反応が出てきてもとらえることができる。

〇今日は，「鳥獣戯画」の学習場面ごとに「おもしろ見つけ」で読む学習展開を考えたい。

・一番出てきそうな反応は，「つなぎ反応」。描写表現をつなぐことで，鳥獣戯画の世界が読める。説明と説明のつなぎや段落相互のつなぎも「つなぎ反応」に含まれる。①の段落はつなぎ反応が多く出てくる。

・２つ目は，「筆者反応」。読み手に語りかける表現や，文末表現の工夫。

・３つ目は，文章を読んでいろいろと気づく「気づき反応」。

・４つ目は，⑨段落に出てくる「納得反応」。筆者の断定的な表現に，納得できるかどうか反応しながら読める。

・説明文の授業でよく着目される接続詞について。「しかし」などの接続詞に着目する際は，「筆者反応」が働いているのではないかと思う。筆者の心の動きに反応しながら読める。②段落目の「けれども」に着目すると，筆者の心の動きが分かる。「もう少し～してみよう」などの表現も，筆者反応を使って読める。

〇「高畑さんは，この説明文で何を伝えようとしているのか」という大きなめあてで入ると，「漫画の祖・アニメの祖・人類の宝というわけを確かめていこう」という読みができる。そうすると，直観を確かめながら読み，「わかった反応」で線を引く作業ができる。その中で，「気づき反応」や「筆者反応」，「つなぎ反応」などが出てくるという構造の授業が考えられるのではないか。授業の具体を探っていきたい。

田中先生より

〇説明的文章を読む際の直観については，「問い」と「答え」をとらえることだけが直観ではない。説明的文

章に対して全体的に感じ取られる反応がすべて直観に含まれる。「問い」と「答え」という骨格の部分への反応だけでなく，表現の仕方に対する反応も当然含まれてくる。いろんな角度から教材を読めるようにすることが望ましい。
〇深めるところがない授業は，授業と言ってはいけない。言語技術を身に付けるというのは，例えば「倒置法＝強調」ということを言葉で教えるのではなく，物語や説明の内容に対して実感をもって読めたときに初めて伴なってくるもの。言葉に対して実感をもって読めるようにならないと言語技術を身に付けたとは言えない。
「岩かげに　スイミーは見つけた、スイミーとそっくりの、小さな魚のきょうだいたちを。」
この文の倒置法の効果の実感は，「岩かげにスイミーは見つけた」という文章に「スイミーは一体何を見つけたんだろう！」と強く反応できないと，得られない。実感をもって読めるようにする子どもを育てていきたい。

（グループごとの教材分析）

●1グループ

・この教材は，細かいおもしろ見つけをしにくいと感じた。高畑さんが「鳥獣戯画」を読んだ文だから，自分たちの気づきをおもしろ見つけで書きにくい。高畑さんは，「鳥獣戯画がアニメや漫画の祖だというすばらしさ」を書いているのだから，その視点で読むと読みやすい。
・「鳥獣戯画ってすばらしい」という読みと「高畑さんが鳥獣戯画をどうすばらしいと感じているか」という読みの２つで層の読みをしていくといいのではないか。

●2グループ

・実際の今までの授業の中で，「子どもがなかなか１段落に反応していなかった。筆者反応が出にくかった」という実態があった。第一次で，挿絵と１段落の言葉をつなぎながら，１段落を丁寧に読んでいくことが大切だと思う。１段落の中で筆者反応を大切にすることで，つなぎ反応や納得反応が出てくるのではないか。

●3グループ

・「筆者反応」が多く出そうだと感じた。読者を誘う言葉や短文の畳みかけ，体言止めなど，読者を引き込む工夫が多くされている。段落の順序も工夫されている。①段落ではうさぎとかえる，②段落では絵全体の説明，③段落では漫画の祖，④段落ではアニメの祖に焦点を当てている。この説明の順序も「筆者反応」として出てくるのではないか。
・「つなぎ反応」については，絵と文章をつなぐことによって表れそう。アニメの祖・漫画の祖とその説明をつなぐこともつなぎ反応に含まれるのではないか。
・説明の内容に対して納得しやすい部分も多いので，「納得反応」も出やすいと思われる。

●4グループ

・まず，「反応」について整理をした。「つなぎ反応」は，言葉をつないでいったり絵とつないでいったりする反応。「ページをめくってごらん」「どうだい」に対して反応すると「筆者反応」になる。最後の段落では，「本当に納得できるか確かめよう」という読みで「納得反応」が出てくる。
・「漫画の祖・アニメの祖・人類の宝と言われているのを確かめよう」という大きなめあてをもち，「ここの段落では，漫画の祖と言える理由がありそう？」などと問いかけるところから授業を展開していけると考えた。

小川先生

・今までの説明文は，題名から内容が伝わる文が多かった。事実を知らせる説明文が多かったので，批判的にではなく，何を伝えようとしているかを読めば良かった。しかし近年，「生き物は円柱形」「動いて，考えて，また動く」など，書き手が前面に表れている文章が増えてきている。それは，批判的に読む力を育てようとしている表れだと思う。題名も意味深なものがある。
・「鳥獣戯画を読む」という題名も意味深で，「高畑さんがこう読む」というニュアンスが含まれている。
「高畑さんに寄り添うだろう」「高畑さんの見方・考え方が散りばめられているだろう」「高畑さん流の論理の

展開で表されているだろう」という３つの作業が子どもの中で行われる。「漫画の祖と考える」理由を読んでいくときに，つなぎ反応の中から気づきが生まれてくる。「どうだい」「くわしく見てみよう」という表現は，読み手に目を向けさせて論理を展開していく書きぶりになっている。

・今までの反応を加工して授業づくりをしていく必要性がある。

・導入をどうするかについて。自分なら，この単元に入る１週間前からとことん音読させる。子どもが内容についてよくわかった上で，「高畑さんは何を伝えようとしているだろう」と投げかける。繰り返し登場する「漫画」「アニメ」などの言葉や挿絵に着目させて，高畑さんの伝えたいことを理由づけしながら読めるようにしたい。

・丸ごと読みの構造で読むのも面白い。「漫画の祖」「アニメの祖」「人類の宝」「文章構成」の４つの層で読めるのではないか。丸ごと読みの展開も考えていきたい。

田中先生

・丸ごと読みを実践していくために反応の力を育てたい。

・筆者が前面に出ている作品は近年の傾向。従来の説明文とは変わってきている。筆者が前面に出てきている分，批判的にも読めるが，小学校の段階では，最終的には「なるほどね」と共感的に読めるものなのではないか。

・反応について。学習者が言葉によって注意するところが意識できるようになればいい。反応の種類を整理するというより，反応できる力を身に付けさせたい。

・高畑勲さんの情報は，子どもに与えたい。岡山出身の方。スタジオジブリとも関わっている。筆者に関する情報を与えることで，筆者が子どもにとって身近なものになるようにしたい。

・「漫画の祖」については，切り取った一枚から考えられている。「墨一色」「抑揚のある線と濃淡だけ」というところから，見事な筆運びという素晴らしさにつなげている。一枚の絵から「生き生きと躍動」したように感じるところ，リアリティのある人間くさいところの魅力も語られている。
今の子どもたちがもっている「漫画」のイメージとはちょっと違って，社会の風刺・批判・世間へのメッセージなど，漫画の根本的な概念についても考えられている。「線のみ。大きさがちがうはずのうさぎとかえるが…」という表現には，そのような概念も含まれている。大人が読んでも読みごたえがある作品。

・高畑さんにとって「鳥獣戯画」は，見るものではなく「読む」もの。物語を語っているものとしてとらえられている。

小川先生

・今後は授業ベースに乗るように，分析を進めていきたい。

赤木先生

・授業分析は，結構複雑。高畑さんが鳥獣戯画をどう見ているか，ということを押さえなければいけない。単純な反応だけではいけない。おもしろ見つけを重ねていくことで，丸ごと読みに耐えられる子どもを育てていくことが大切。

正木先生

・層で読んでいくという方法が納得だった。

・はっきりと覚えていないが，「漫画の方法」という教材が昔あった。その中の一文で，「漫画は理屈抜きにおもしろい」という表現があった。そういう教材と並行して読んでいくのもおもしろいと思った。